

[4] 慢性期の刺鍼手順、その意味

慢性期には腹診を中心に見ていき、具体的には、主に腹の痼りを減らすことを目指す。腹の痼りを動かすと、そこから出た邪気が動き、頭に衝き上げる「上衝」という現象が起きる。鍼をした後に、頭が痛くなったり、熱が出たり、目眩がしたりと言う、首より上の症状が出たら、それは上衝した邪気に因る。腹の痼りを動かすと言うのは、発酵中の濁醪やビールやシャンパンを揺するよ

うなもの。揺ると、泡を吹いて上の方に吹き出す。「上衝」は、それと似た現象で、邪気は泡みたいなもの。つまり、同じような動きをする性質があるものを昔の人は、まとめて「気」という名前を付けて呼んだようだ。

もし、顔が赤かったり、熱があつたり、また、鎖骨まわりに衝き上げるような感じを受けたら、既に「上衝」しているので、それを治めるために手甲に引き鍼。これは、慢性期に急性期の症状が混じっているときに見られる体の状態。

急性症状が混じっていないときには、手の陰経に引くことから始める。腹の痼りを動かしたときに発生した邪気を手の方に誘導する逃げ道を作っておくため。

物体を擦って静電気を発生させると、物体の片方が+に帯電し、もう一方が-に帯電し、色々な現象が起きる。-に帯電した物体の途中から地面（アース）への逃げ道を作り、遠くに逃げられるようにすると、-の電子はそちらに逃げ、静電気が発生したことによる現象は見られなくなる。

邪気も気なので、これと同じ性質を持つ。手の陰経に引き鍼しておく、腹の痼りを動かしたときに発生した邪気は頭に向かわず、手の陰経の方に逃げる。

「手足に引く」と言うのは、邪気の静電的な性質を利用しているようだ。濁醪のビンの途中に孔と開けてガスが逃げられるようにすると、栓を飛ばすガス圧はなくなると考えてもよい。

また、これは、腹に発生した邪気が頭に行くときに胸を通るからでもある。手の陰経は、肺や心臓の別名を持つ、胸の内部の邪気を引くのによく使われる経絡なので。

次に、手の陽経に刺すのは、手の陰経に刺したこと

の補助で、手の外側（甲側）にも邪気の逃げ道を作っておくため。邪気は、内側のような陰位よりも、外側のような陽位からの方が体の外に出やすい。

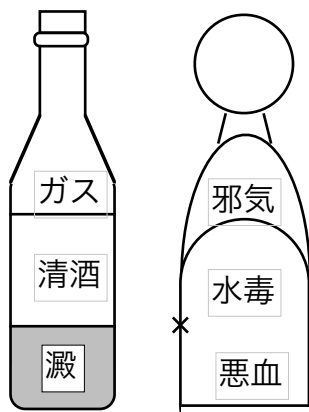
同時に、胸より上にあがった一部の邪気が手の陽経の方に誘導されるようにするため。最も古い経絡の文献の一つである馬王堆医経の陰陽十一脈灸経で、手の陽経は肩脈・耳脈・齒脈と呼ばれたように、肩胛骨・鎖骨から上の邪気を引くのによく使われる。

そして、腹。腹の中で先ず横腹を刺すのは「陽に引く」ため。腹の中では横腹がいちばん背中に近いので、腹の痼りを動かしたときに発生した邪気を、陽位である背中側にも逃げ道を作り、胸を通して頭に行く邪気を減らしておくため。

上衝のイメージ

1. どぶろくを静かに置いておく

重さで三層に分化 (c.f.病が静のとき)



2. 栓を抜くと、泡となって噴く

(c.f.病が動のとき、上衝)

